

安田講堂の再生と大学アーカイヴズ

稲垣 栄 三

『東京大学百年史 通史二』のなかでも触れられているように、関東大震災後の本郷キャンパスの復興は、宮澤課長を兼務していた工学部教授内田祥三の構想のもとに進められたのであった。その内田の構想のなかで見逃すことのできないのは、キャンパスのほぼ中心に、大学を象徴しうる記念的な建築を造りたいという並々ならぬ理想の追及が底流に流れていたことである。震災以前から工事が開始されていた大講堂はもちろんその一つとなるはずであった。そして被災した図書館の復興もそうした意味合いを含むものとして、彼の構想の一部に収められていた。

内田の考える記念物の具体相は、単に規模が大きく、威厳のある表現をもつ建築というイメージで尽きるものではなかったらしい。それは全学的に利用されうる機能をもち、かつ知的な内容と、そしてできれば大学のなかで累積されてきた研鑽の歴史が含まれるような建築を描いていた形跡がある。大学図書館はまさにそのような意味で、キャンパスの中心にあって大学の象徴としての意義を荷うべき建築でなければならなかった。そしてもう一つ、図書館と並ぶ記念的施設として、内田は大学博物館の実現を秘かに期待していた。

欧米の大学がキャンパス内に大きな博物館をもつのが通例だということを知っていたのかどうかは判らない。内田が震災後の復興

に当って、大学博物館の実現をことあるごとに総長や関係方面に呼びかけていたことは、戦後の回顧談でうかがうことができる(内田祥三先生談話記録『百年史編集室蔵』)。それによると、震災直後、物理学教室の地下室に収められていた人類学の坪井正五郎教授収集の資料を見に訪ねたのが、そのきっかけであった。坪井の収集した各種の標本資料は部屋中に充満しており、見ようとしても取り出すことのできない状況であった。研究の進展とともにおのずから集積される標本や資料がこのように山積した状態になっているのは、何も坪井教授の研究室だけに限らない。問題は単にスペースが小さいことだけでなく、教授が退職するとその収集物が未整理のまま放置されるか、あるいは廃物同様に物置に入れられるか、最悪の場合には廃棄されることさえあるということである。そこで内田は、講座、教室、学部を超越した機構をつくって、貴重な標本、資料を管理することが絶対に必要だと思に至るのである。内田は大講堂、図書館の建設が進行している時に、これにもう一つ博物館を加えて、三者鼎立するようなキャンパス中心部を夢みた。彼の口吻から察すると、大講堂を中心として、その左右前方に図書館と博物館とが対峙するような構想だったらしく考えられる。

内田の構想は建築家としての理想に支えられており、また現在振返

つてみてかなり先駆的なキャンパス像だったといえるであろう。東大に大学博物館が総合研究資料館という名で実現したのは昭和四十年代にはいつてからのことであった。しかもなお、大学内のすべての研究室で蓄積され、かつ継承者がいままに放置された状況にある標本、資料の類は、依然として少なくないのである。

大学博物館あるいはここで提唱する大学史料館（大学アーカイヴズ）は、各部署での先端的な研究、教育とはさし当って無縁なもの、それらが必要な施設であることについては誰しも否定しないが、しかし身を呈してこれの設立に奔走するほどの緊急性も研究との密着性も感じられないもの、というのが大学内における正直な処遇であった。内田が熱をこめて博物館の必要を説いても学内の反応は冷たかったらしく、結局内田の構想もこの点については実現しなかった。これらの施設が実現するためには、内田が考えたように、各部署内の構想を超えた、より大きな理想の持続的な追及以外にはありえないと考えるべきであろう。

ひるがえって現在のキャンパスの状況をみると、基本的には内田構想にもとづく全体計画を一応保持しつつ、建築は増加し、かつ中高層化して、施設はほとんど飽和状態に到達したとみてよい。これ以上さらに施設や人の増加を考慮する場合、内田構想に終止符を打って、全く新しい計画にもとづく抜本的な再開発が必要にならないとも限らない。ただ、今のところ、内田案の骨組はまだ健在であり、安田講堂は依然として東大のシンボルとしての役割を果している。問題は安田講堂をどのようにしてシンボルにふさわしい内容をもつものとして活性化

化するかということである。

私は、安田講堂の再利用を考える場合、講堂としての機能を復活すると同時に、すでに百年を経た大学を象徴するに足る内容、すなわち大学の歴史に関する研究、資料の保管、展示等の使命をもつ大学アーカイヴズとして再生するのが最もふさわしいと考える。大学アーカイヴズがいま必要とされる所以は、ちょうど震災後の内田が体験したのとおなじ状況が、大学史関係史料に訪れている点にある。部局を超えて全学的な管理のもとに置かれなければ散佚することが明らかな貴重史料が、いま全学中に散在したままになっている。しかもこれら史料によって明らかにされる大学史は、大学における知的活動を支えてきた膨大な人々の軌跡を示すものであるし、また大学で行われてきた研究に伴う文書史料が収集されることになれば、大学博物館とともに、大学人の知的活動そのものの歴史を物語ることになる。アーカイヴズがキャンパスの象徴となりうるのは、大学を構成する人々全員の活動の歴史がここに集約されるからにはかならない。

安田講堂は竣工後すでに六十年を経過したから、今後の維持のために、全面的な構造診断ならびに大規模な補修ないし改修を必要とする時期にきている。正門から講堂正面にいたる道がいわばキャンパスの背骨であって、安田講堂の外観そのものが、大学紛争の記憶も含めて、すでに歴史的存在となった。半円形の平面をもつ講堂は、入学式や卒業式はともかく、学内でのさまざまな催しに十分に対応しうる空間である。国際あるいは国内の学会やシンポジウム、または音楽や演劇などのために開放されることになれば、キャンパスの活気は一挙に

昂まるであらう。

新たにアーカイヴズの機能をこの講堂に付加するとすれば、この建物の背面側ということになるか。幸いわずかではあるが背面を改築しつつ面積を増す余地が残されている。講堂の正面ファサードは現状を維持した上で、背面で増築するとともに、講堂裏側としてでなく、もう一つの正面をそこにつくすることも可能である。

現在の講堂の使われ方はたぶん暫定的使用方法であって恒久的のものとは思われない。なるべく早い時期に安田講堂が再びキャンパスの中心として名実ともに蘇えることを期待せずにはいられない。

(いながき えいぞう 東京大学工学部教授)